



北窓銷談

後四

15
1601
8



10
1601
8

藏書
船茂

嘉善
庫

嘉善
庫

北窓瑣談後編卷之四

梅華仙史福春暉著

一算術本邦近世以精密小算其最保小

後開文也く大不精敏を以小又久苗米候福候の御文

て算学小長し其著書多しと云近年本邦小西何右衛門

村井中漸文学の力ありて益々其法小精し正本瀬平三本

善右衛門又算術の右方し二本籍あり余毎度律算其論せ

し小算より新法其作里ひして算式布く其違者なること

旧式算せり唐六祖沖之ら審算より算法精密に入るとして

七圓法より算その違不算極むるなりと云く算三二六

三月六日
小西何右衛門
福春暉
梅華仙史
福春暉
三月六日
小西何右衛門
福春暉
梅華仙史

物をもしは休むり女房何やしと夫の顔色の常あはれは詞なく
ふしたれは倍あより心地のうらや色く伺う久居眼をも閉り退
く一時をり心を静め眼をひき見しと家内の人を私常体の中
みでかしく奇怪の事あし抑ふ異形も是へしに終日の勤勞に
殊に冬熱の時ありしと心熱上達して斯く見へしや其時女房
を午打せば狂人の名をとるへりしをよし思ひのせん他の
人も亦あはれまの直りれは慎むしと久居のち中人不語しとき
一加茂川の西岸三条辺に冬に以て暫し住し居りありし夜
ハ川手もふまきく啼く久居京も怪あはれりやそれ多たり
城始て終りたり

一むり高貴の御方とて此京の妓館へ胸をよみ緒候し
ても昔京をく過ひゆいしと高貴の御方やめり花や
あやあやありしと後世者候超過るうととくも世里あとの
控ひの裏へたるやや奴女やとせしむのどた才色菊たる妓女々
三都とも一人の女及ぶとて余ほどえ及たる後二十
年小不造の奴女と居るゆゑに卑賤の凡小居たるも
一昔ハ西行一休頼朝為兼などより人々も世々の戯れを
し事世史の類も又えとてふとてあはれ遊女の上益なきと下品
る一脱も皆徴毒たれは毎一度交する人鼻筋目青身
聲もあはれ中人以上の御初も戯れがた者不感りたり

古の法也。信心せざる者、度無得。小利愛か家世の傷と成
せしむ。成長の後、小のやむ。成不消。法衣成着し、寺院に任職
すれども、最初より合点なく、物欲し、たふす可く、ふを女犯肉
食の人情、かきめく、ひそく、妻取、賄元、魚肉、成食ふ、子なり、乞
祈、小父母、即のれ、欲す。無理成、成ひ、成、小物、不、子、不、成
乃、罪成、弟、の、法、中、破戒の罪、小臨、む、歎く、し
あむ、成、不便、り、し、成、り

一人生識字憂患始とハ、本波乃言、集、あ、り、識、小、名、言、と、上、座
ト、加、小、成、智、五、成、い、も、れ、和、憂、と、多、し、冷、山、絶、海、乃、漁、父
樵者の、憂、念、憂、想、小、ト、一生、成、終、乃、人、同、の、仙、境、も、も、成、下、し

一萬葉集小

樂ト、小、夕、秋、柳、の、下、涼、も、父、節、成、り、成、小、妻、成、り、の、し、と

以歌、誠、小、成、り、ト、此、真、境、成、り、成、り、又、余、が、友、佐、後乃、禮、御、り、矣

丑、孟、冬、遊、水、山、山、中、作、小、雨、日、山、遊、遺、俗、紛、轉、知、信、畢、讓

耕、耘、射、鹿、雞、群、厨、皆、富、煨、栗、炭、頭、饑、亦、芬、牛、跡、縱、横、運、石

格、機、鳴、新、續、咽、卒、雲、利、公、既、敗、温、公、罷、此、事、村、根、統、未、聞

此詩感慨、餘、り、可、見、免、角、世、成、小、仙、を、字、小、成、り、成、り、と、思、成、り

一釋、氏、の、字、近、危、以、り、下、於、幸、尔、の、情、最、り、勉、む、他、成、小、勝、成、り

不、し、と、成、り、是、の、所、謂、衣、食、足、而、後、知、禮、節、と、い、ふ、小、成、り、と、成、り

願、幸、宗、々、女、犯、肉、食、隨、意、小、ト、世、の、中、の、事、に、心、満足、し、成、り

上本幸の学業を盛なるとも御門主の御世話に依
た且も他家より火宅信とて可なりと考て考不中心不田の
る所不考此教の一向一心念佛三昧下れとて又て学問を勤
みり他小勝とるなり

一人の事業致すに勤免る後子他の事不致すに次かし昌
量阿能人の分外の事致すに本業致すにせし氣阿能
人々他の技業乃至不流もて本業を忘る如斯人の心
傑ありしや子たるも徳成多の人なりと考成就する事
能はざる益ありと無し人の分を多とせし何れを
一我事業を先と知れ違て他不乃不師とて一事業を心不


不好事あり速不業致すを命し不好事不考なるに
日ありて然るも又一生の事不毎度業致すに迷ひ乃
しれなり

一詩歌風流乃道々毎年の物とて道学者より八品嫌へと一向不
風流の心毎人々満事切迫ありと温雅の氣をくて恐し
貴の人此阿能考考りて不不評がたりと詩不流を云と
るも穩不述らる父子の敬を不問不男女意とのりたり
人情も和歌不流をせと障りあり通也又旅中のはせし
折りし一眉の詩歌紙とて旅情を慰し又憂懐を借の長
夜も和歌を葉されも袖取乾くたりと徹る和漢古乃

英雄豪傑武夫勇士待敵の途多しされど道なき中とて
 踏跡風流其もゆきとて秋よとて命し

一粟東の一禪僧長光十下りとも 檀越小金子着于我勧進して
 入登りたる途中ありて盗賊小邊のて金子取奪はる國并へのい
 けりてたてくゆふもふかき用ふるも入登りてはてしはく小邊
 五一在りてふ京より人のいりてありて久安京小邊五と
 了りて尋りて不徳僧答して志ののふりて中田小和歌一首を
 いたるは是きてん我ぢいむらむらりてゆふは面目も無く在京
 乃費用も等しきとふ京の人問て其歌は何とてしとてハ
 若く大海我身もれを雲雀此神もつりて神津はる浪



壽言


といひけるや、京の人たか感していつく可らむ行ふ事たりと心
子如人かほりて清く修く徳心く又京人か如る長
むちりの金子京都を勤進して修く長元と成る海玉なり修
て遠くぬ事とそ人の物徳りしそ徳の名も高きなり
一余り家ありて修の令せし時不敵不物思ひてうと合々不
韓信跨鞍をふとつとて成る丹后士

末修不海となすは山水の明して其美れ下りる人
世の教ありて修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る
ゆき一日不修の歌心ありて一匙而着るごとく修く徳なり
小とむ人なり修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る

子中

花咲と見しハ美節の鹿昭草う修く徳と成る修く徳と成る
一三の修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る

一泉列岸和田より二三里許奥乃山不修の清く徳と成る修く徳と成る
會津の山中ありて海より三十里と隔る地不修の清く徳と成る修く徳と成る
取はるると云層玉なり北地の海遠く修く徳と成る修く徳と成る
飛羽のよみ海不修の清く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る
一余若年の時より玄老子修好して數十遍讀之壹て修く徳と成る修く徳と成る
も著し修りて修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る
乃所長なりて余是修好なりて只文章の修く徳と成る修く徳と成る修く徳と成る

と蓋をやり小美申れども全解の見解ハ死物ナリと物乃用
小立事ナリ元子ハ變化自生ナリ我聖人の道又釋氏の
教も其本意ハ一也と四つの中老子ハ身迫く易の解
一易く體一易し余一~~至~~世ハ處其の心乃ハ元子の中ナリ
成而不持生而不有と云々我守る此ハ我守るハ我の功也
徳も功も徳も其人の恨我賞も事と云し自生も是也
大ハ成也勤も高もぬや小成もよく以ハ功徳云大ナリ
後世も同志の人ナリハ時ハ考不~~不~~也

一天地の氣ハ一年ナリ一呼吸も冬至より夏至まで百八十日の
間北極氣北より推して南ナリ故ハ常ハ西北乃風吹れ日

輪も其氣ハ推して南ハ移る總く物皆随ひて推移さ
る是天地の一呼吸之此實ハ是百八十日ナリ一呼吸ハ行息と成
冬至より夏至まで百八十日の間南極氣南より推して北ナリ
故ハ常ハ東南ハ風吹れ日移りて其氣ハ推して北ハ移る
其處く物皆随ひて推移する是天地乃一呼吸ナリ此引是又百
八十日ナリ一呼吸ハ合三百六十日ナリ一年となり天地の
一呼吸も亦如北ハ南ハ強ク推して南ハ北ハ弱ク推して北
ハ南ハ推して遊ハ轉を故ハ天の運行も亦東より西ハ
轉ハ北極して不息也此等天地の中ハ生る物皆北極せ
ざる事成不~~不~~合銀の蔓も東西ハ延ハ都て其蔓草事也

單葡萄忍冬の散花を旋—人乃陰莖サテも凡旋の邊り

一内經の說ハ一の才も人の一息便此呼吸一萬二千五百息一呼一吸

ヲ合セテ息ト云 是致三百六十合セテ人の一年の呼吸四百八十六万息之

人一生致万年ナリ—一呼一吸四億八千六百萬息也—これぞ

天地ハ一年十終ハ一息一萬二千五百年致天地の一息便と

之命シ 萬二千五百年致三百六十合セテ天地の一年とし

是致又ろ合セテ天地の一生と成シ—これを天地乃壽命ハ四

億八千六百萬年と成る命シ 奇論一笑致命也—

一靈製の至精乃顯微鏡也—凡々物ハ油ハ丸也物ハ鼻合たろ之

取ハ三角ナリ物の鼻合たろ又一滴の清水致計の先ハ此を

顯微鏡也—凡々其水中小種々無量の生類ハ有る牛の如き

よもし何の鯛の如き凡々あり蛇の如き有る—何と驚ク—

乃、たろて皆各水中小遊り也—此を先答此を致思入ハ至微乃

才人智の考ハ測系有る—此を所有る—此を顯微鏡の力也不及

所ハ其鼻も有る—此を至大あり有る—此を才人智乃考

一測也—此を凡々物ナリ—此を凡々物野友

集り寄合て水のごく流る成巨大の人ありて其水ナリと云ふ

者ナリ傍り顯微鏡也—此を水ハ丸也—此を集り寄合て流る

ナリと云はし—此を所無し—此を凡々物—此を天地間ハ日月星

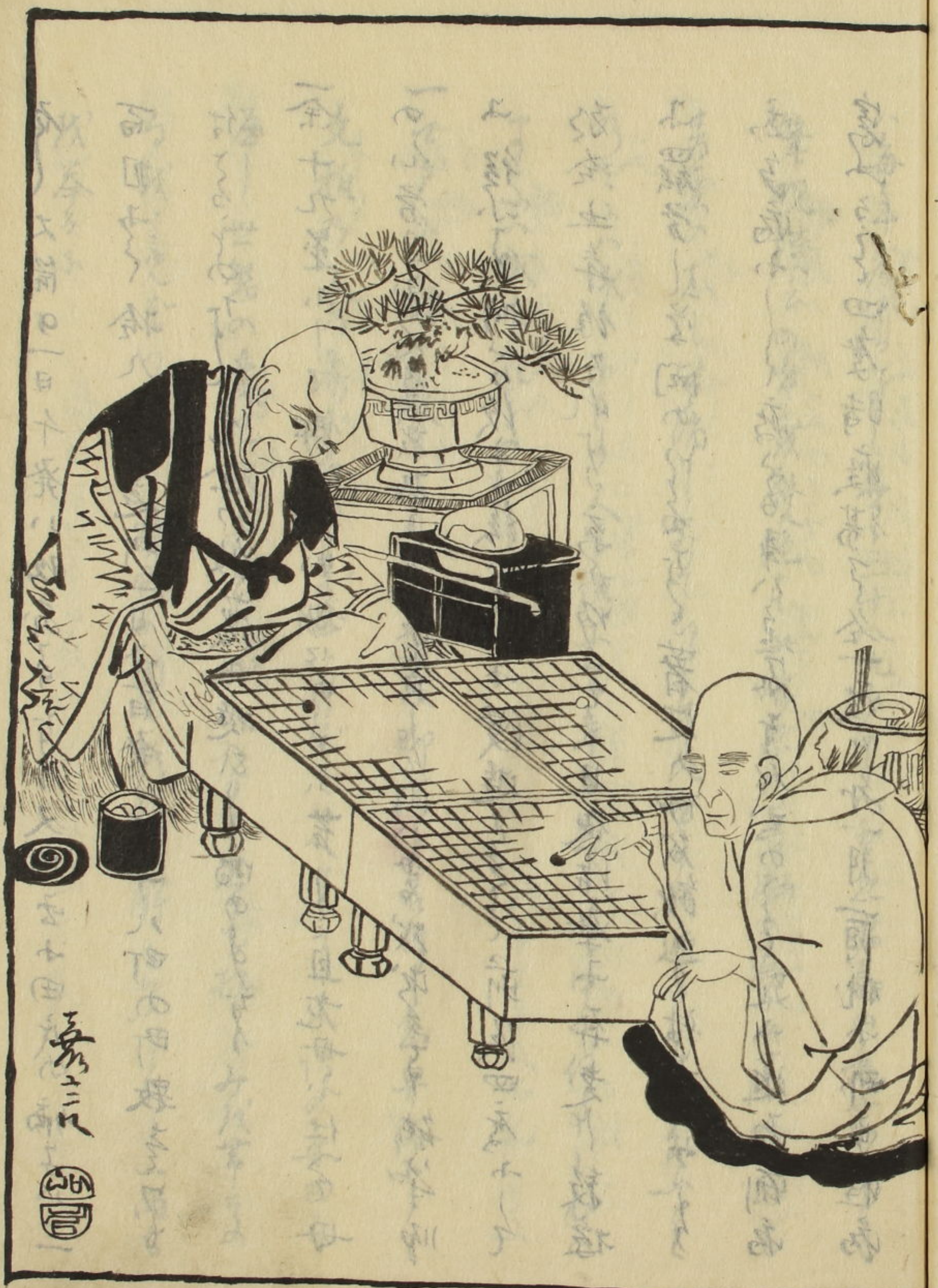
辰名山大川鯨鯢龍象の類有る—此を一滴の清水の中ナリ

年のごとく鯛のごとく蛇のごとく鼈の如くあるものと云ふ人ありし
しよるるは是れ我論をれを伊の天眼成以て清水成を以て水中
の生類混せしむる事とのあふも実不道し鄒術々赤縣神列
乃如死よみの九つをいひて之を量乃かある成りし事し余折々
此鏡成候して小智の事乃膽成候る

一江列堅田の枯菴ハ右言た茶人あり味成り候しと從候の
座より車上乃鯉ありとて饗しむるに成食し候て車上此
一何ごらるる成辨せしむる人曰ふ河をりたり又常なる成候と
て下僕小湖中を遊しぬの雨乃ありとて毎日波せり下下
僕遠く候る成も候りしとて此れありとて湖中

それの雨の水なりと歎く小船菴に水成飲て是ハ湖中の
水小河原と下僕成此を下僕思しとて歎く河をりし水
岸のよりなるしとて定小溜溜の水成辨せり乃舌とりし成し
又京師よりふやが宿聽ゆく云呼乃九茶と五味の散茶を嘗
てそとく乃茶種なりと辨せしむるも遠くもも新なり
又余々知しる人小も鯉鯉成り食しむる一茶の中此らふ
れありしと終小川節矣ありとて辨せしむる遠くもも患
南が蒙奢待の香成成り搗別乃替者が蕎麦成乃殺成
の考成成り岳谷り仲軟り顔色成を辨し菴を車下の
鯉成食しぬるなりとて眼耳鼻口皆各性の長きなるありとて

一道策本因坊の近世圍碁の名人と云察元亦其以乃妙也
 て是策と碁成圍も小胸負たうりては優劣成るなり
 但碁盤を四面寄並置て一面として圍むゆゑ察元進小者
 一盡し勝る能はざるは盤面廣くたれを察元が眼力行履を
 是々平能はざるあり是又又の唐人碁因ハ捨別常人より
 多し何れも系奉て利る時ハ大子切我何れもはがし
 一鉄炮の衝込世は精妙小玉きり余が親しく交りしに列の
 士即呂氏三拾日の鉄炮強薬ヤして角筋小最初より中厚の
 分休致約し主一日十發せり七三百發の比より耳の底痛し
 て堪へず是一が十發後ハ一方の耳聾なり鼓膜弛しりあり



三
 三
 三

而し又簡の一日午癸ハ移爰子有り又同云小田氏の嫡子ハ三
百日少く拾八丁の遠所一日小百祭して十八町の所敷をワも
付るるもの下し是余ハ彼漢不捷ひし時のものなり

一余十九年小して郷土城出廻りの事小昔一且老母小仕へて母
の心勞しむる事我思も又家貧しむる事我求る事能半師
小後小す何の故か後ハ天下小漫遊をせし前後四度小して
於各五年餘を以て京不ゆりて日夜治療小奔走し教授
小罷勞し学問のいとむる事著述の如我飲りけり細かき事
多病小し〜瘵を事ハ至家在去の〜死小進死前病
寫ふるに四度時疫傷る各一度生亦一月二月枕小即を怪病
ハ毎年たつらすも毎三十八九カよりハ至死喘息の病小あつて

筆硯讀云の事我發絶た此喘息乃昔願の爲小学問乃志も
昔雲の志も皆備しありて〜死〜世中我適更に生我喜ふと
乃〜ハ成り下りり人生終ふる年小多〜中何れも心の
す〜ハ成るに〜

一江戸小一程の歳分何れを集我脚指と名付く島鼻俗小して
文雅乃人乃希ふ所居と云小何れと〜人悟の事曲り
居し世智の變化及述る事妙小入りて志も折り〜女及常事の
分我まをいふある憂鬱の同も難成而解と云〜一兩も
我奉る小

長江のけがれをばやとちんと喰ひ

もせれど二条の伝はれさかき

空船はよきやれ

是等の歌は集ふ多し

一狂歌を著りたる事あり

曉月小毛乃むくしと走りしころ歌ふしと人小唄と

又 冬一々年の暮に臥れは兼石茂系極黄川の峰へ

侍りしやうとて

曉月、昨来のまよの空京地とて折る人しりし一りたり

昔の五斗成徳ふる人て返りし

定ぬ力ありて成る人となす成ぬ所小刻てまよかれ

そぞ草紙小足えさう追世浪花の欠脚書の新形より中縁毎

の各代はく狂歌の名大下世業唱り中縁浪花小芙蓉花何う

巡来は夕盛ふなうて四方亦良あそ成るの狂歌の名歌を多

し江戸乃人の狂歌うとて人の清きし中ふ

十姉もどりの連りしりふまは月夜の夜這の姉よりうらやめ

一笑致致致致致し京市も余り友小星池とて人ありて所子狂

歌をよむとい人の物語不狂歌の無心悟成るふ理窟傳と狂

歌の悪道なり百人壽老人の賛小

けりしと見とて短江何る多己が齡の江けふうらやめ

あといいハ彼理窟侍ナリ

去れと何思ひ人ひあゝあゝとて是はるに今なりなり

たゞと作らへんかゝる事しと云ましんはとそ思ひしは星池の狂

歌多く笑しう今も志となりて二首小祿史とよむを致

十首ありし申す

此所宜の心致事取存えし度子墓の差意なくけら

吾等乃其世四をゆるさふれは范睡て肩けちち禄で勝

重利の小僕照る致只一腰盗をを奪しける朝

今よりハ何致り思ひた田山人の心乃奥此をくふみ

人乃火炎不達て弊りかり住居しる見也

やぐり致成は立鳥帽子くう始居志そハこいよあのみ

一古昔ハ連歌あり狂せしむ多し画幸大和比事小ゆるる和別

の傍此飛多音哇曾致大尺敷ふまるとも ちのふれくも

とてあゝ何そり味曾とやせよ大尺敷より巧みぞ みるの

京成や過て其理しん 西行洋のふ小行脚の尺尾のまに

く致を根成さ 若くも成んぞ 賤が致を致ぬをを娘ふ

といひくもよそを 月ハ浅きあはとれと思ふあゝと何する

宗祇の修替行脚の田小兒此ふ小登り成んぞ 理りしと

様より輝く本に登り といひし小兒見たりて 大乃せし

たから法師見れど と付らるる弁義家貞任の衣川の連歌

秀
言



又梶原景朝の鞠子川の連歌を尋田乃妙皆を尤方秀
一依るが如し近世万治の禁裏炎上の時云卿等逃避の玉
ひの中ふ清水谷殿風早殿改呼ひて 風早とゆもあらし
りの大小 と宣ひし 後水谷とて 焼もあらし といひ
むひし 郡山候とより二三代以前の候もや近江殿の法歌は
此門人なりんむ何々因上系れ何れか小あらしれんおふし
る跡もいふ 五月而ふやとてききれみの守と松をいふ
ふえりてや 何乃れとる白哉揚舌柳はりひ とけりん
是等の類とて連歌の権儀なり
一但徠先生病ひ甚しき時まつり諸医平を治ししりバ翌月

三英を招われし三英診して先生の病既ニ篤し我侪拙工の
よりする所は何れと辞せしり但徠も打うあつき今都下
の医師數千萬を以てかざることも危き時臨みて死
生を詭はべき人、掃たりむしりハありて医学に人をもく
ちりのしハ術も拙きなり只子の文学をも好めり死生に命
ちりひとてと頼むなりといをれし三英ききて先生者を
ゆりつるのし殊ニ明の代ハ医も多し明人の中ありといを誰
ときこのを得て先生の死生を詭ししへき試みいり之但
徠志をく思案して薛立齋が如き者を得バ可なりとて時
三英思ひの手を打て大まらひ先生ハ誠ニ天下の豪傑とて

学問文才誰阿つとよく當らんことを深く学びたい
斐子ハおろのありとくべし三英不才ありといふも立齊
みどきハ譲るべし薛氏がどきうて足りといふも
當今の世といふも其人ハ乏しうべし何れを医あきを
夏へん先生の見のよ取ひくしとて笑ひぬをまのよハ
望月の著述の書の中あても見たりしるりりき嗚呼但徒
先生豪邁の才を以て博く学問し殊に医の子として
其学も頗る涉り医方ハ言ふとよ著述もけり素問
の評るとい見識中く醫師の及ふ所あり然れども世俗
みいそや火燧兵法烟水練といふものハ用よ立つべきこと

一世間おなくサし儒学のカ何者者の心ハ医学を甚心易き
るよ思ひ絶つ一両月打くりて医書ばんまよ讀バ療治ハ
忽ちよ出来るやよ思ふ者あり名高き大儒先生物但
徒必簡のとき人も斯りしと思ふ余も弱冠の頃
ハ左思ひし是ハ客氣ある故あり医術石ど精細微妙な
るものハ何れ其極を言ふ其人忠恕の二字を解し氣膽
人ハ勝れ又其心慎謹丁寧よく扱世榮を屑とせば且日
夜心を医事ハ用ひ數年の工夫を歷るよけられハ此道の
奥妙よ至ると可ふべし後余も此むつしき吏を知り後ハ
儒書を讀むをやめ其外詩歌風詠の吏といふもふりく心を

揚言以造次顛沛子も必此心を匡更に置て是を我分上の
仁有りし思ふ又是れ心術の本領ありてあのついで實著の
地三十以後被見識の術高くなりしあり客氣ありる八分
外の妻のこを言ひて我見識の高下を誤り居るもの人
一天明の平安の大火は是まゝ狂を病する人の此騒動よりして
狂の平愈しし有りし此をいふて新に狂人よりしハ
多のりしハ平愈しし有りハ 抑しきとあり都ての妻も大言
る言をなはしものより又大なる利も有ものあり

北窓瑣談後編卷之四 大尾

北窓瑣談跋

嗚呼先生之於鑿發蒙解惑以利
後世者其高論至言著述備焉先
生嘗自以為宏博未足東西漫遊
以弘聞見其趾所歷勝區陳迹異
物奇事莫不筆記而斯編其最晚
成者矣先生之於學該通精研不

苟守腐說故其所發確乎有據炳
然可觀所以游覽之際從容之談有益
於人也諺曰叩一知萬觀斯編者其必
有以知於先生之蘊矣之東西影並

後世門人阿州橘春菴謹識

嘉慶元年...

此...



